

貧困による「子どもの体験格差解消」へむけた

連携事業レポート

～企業SDGs×自治体×NPOによる6つの事例から～



CONTENTS

- 02 **想い チャリティーサンタの困窮世帯支援** —— ルドルフ基金の仕組み等 ——
- 04 **生活困窮世帯の思い出不足について** —— ニーズ調査から見たこと ——
- 06 **【座談会】体験活動に参加して** ～親子の変化と今後への期待～
- 07 **【対談】お母さんの座談会を聞いて** ～子どもが育つ「体験」を担う大人の存在～
NPO 法人岡山市子どもセンター × NPO 法人チャリティーサンタ
- 活動事例**
- 08 **困難な子どもたちに気がつき、自分たちにできることを**【株式会社大町】
- 09 **共に生きる社会の実現のためにできることを**【株式会社ありがとうファーム】
- 仕組み紹介**
- 10 **家庭の喜びが社員の喜びになった**【株式会社ポーラ・オルビスホールディングス】
- 12 **自分たちらしさを生かした社会貢献**【ギャップジャパン株式会社 Banana Republic】
- 14 **顧客を巻き込み、家庭にプレゼントを!**【ジュエリー・タナカ】
- 16 **お祝いの気持ちを広げていくために!**【ケーキ工房ポム】
- 17 地域課題と学生の学び
- 18 その他の取組紹介



NPO法人チャリティーサンタ
Charity Santa

想



い

私たちは、生活困窮世帯の支援を第一に活動を始めた団体ではありません。
 しかし「すべての子どもたちのために」と活動を続けるなかで、
 私たちの事業を通じた体験を届けられていない家庭があることに気がつきました。
 大人たちが手を取りあうことで、子どもたちを支える力になることができると、私たちは信じています。
 本冊子では、困窮がゆえに十分な体験活動ができていない子どもやそのことに負い目を感じる親の存在に気づき、
 子どもたちの思い出や体験を支える仕組みづくりと一緒に取り組む協働事例を紹介します。
 ご一読いただき、企業で、団体で、個人で、子どもたちのためにできることを見つけていただければ幸いです。

厳しい環境の中にある子どもたちに思い出を届ける！

◎ ルドルフ基金の仕組み

チャリティーサンタでは、厳しい環境の中にある子どもたちに対して、寄付を集め、子ども時代の心に残る思い出支援を行う「ルドルフ基金プロジェクト」を行っています。

チャリティーサンタと岡山市が協働で実施した生活困窮世帯を対象とした二一調査(後述)では、「子どもの長期休みに旅行や自然体験などへ連れて行ってあげられない」等の声が多く、特別な体験に伴う「思い出」が不足しているという意見が目立ちました。

時間的、精神的なゆとりを待つことが難しい家庭では、誕生日、クリスマス、家族旅行などを十分に経験できず、その劣等感や罪悪感を抱えている様子もうかがえます。

すべての子どもたちに特別な体験や思い出を届けるために、NPOや行政だけではなく、地域住民や事業者などすべての人が「地域のなかの当事者」として子どもたちを支えることが必要です。その支



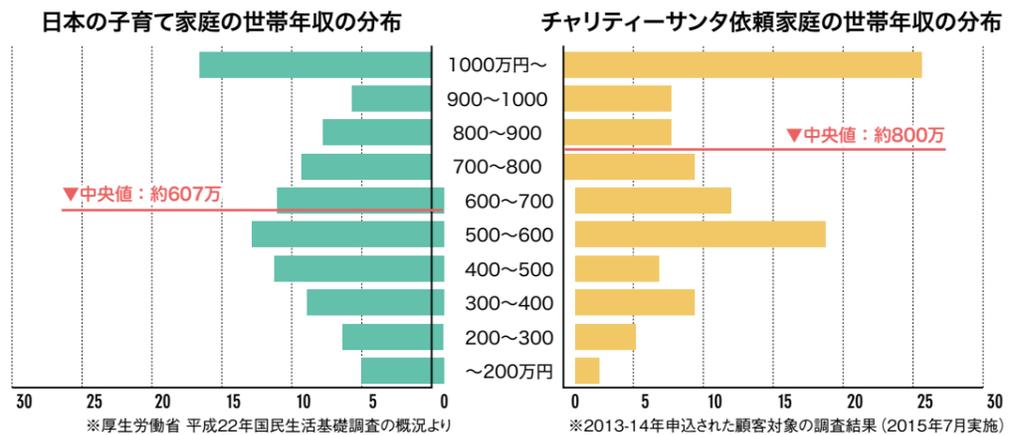
私たちは誰に思い出を届けているのか？

チャリティーサンタの主要な事業はクリスマスイブのサンタクロース訪問によるチャリティー活動です。訪問家庭からいただいた寄付で途上国や被災地の子どもたちの支援を行ってきました。

2014年のクリスマス、ついに届けた子どもが1万人に到達しました。その際、私たちが思い出とプレゼントを届けている家庭はどのような家庭なのだろうか、という疑問から、翌2015年に、大規模な顧客調査を実施しました。その結果わかったことは、これまでにプレゼントを届けた子どもたちの家庭は、世帯年収が比較的高い層だということでした。

日本の子育て家庭の世帯年収の中央値は607万円、チャリティーサンタの顧客の中央値は約800万円であった一方、経済的な厳しさを抱える家庭の割合が少ないこともわかりました。

シングルマザー100人に対して行った調査では、3人に1人が「クリスマスなんて来ないで欲しい」と感じていることがわかりました。(サンタ白書2017) 私たちが活動を届けられていない家庭に何ができるかと考えた結果、「厳しい環境の中にある子どもたち」を対象とした

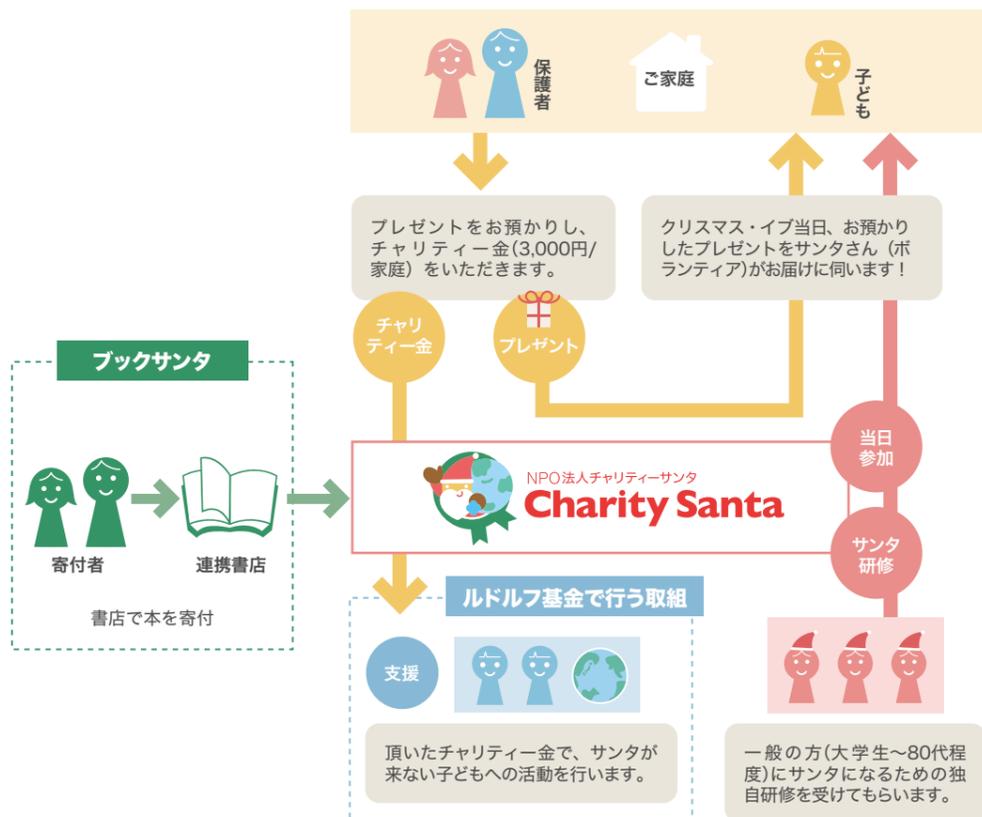


新しい取組「ルドルフ基金」を2015年にスタートしました。(左ページ参照)

ブックサンタについて

ルドルフ基金プロジェクトで子どもたちに届けるプレゼントの一つとして、絵本や児童書を「ブックサンタ」という取組で集めています。全国の連携書店で寄付者が選んだ絵本や児童書がチャリティーサンタに届き、サンタクロースからの贈り物としてクリスマスや誕生日など、子どもたち一人ひとりのハレの日に届けています。

【ルドルフ基金とブックサンタの流れ・図解】



生活困窮世帯の思い出不足について

チャリティーサンタでは、活動で多くの家庭を訪問する中で、クリスマスにも子どもの貧困があること、さらには「体験の格差」体験における子どもの貧困につながっていることに気づかされました。そこで2019年度、岡山市こども福祉課との協働により、「岡山市市民協働推進ニーズ調査事業」として、ひとり親の生活困窮世帯を対象とした「体験」に関するアンケート調査を行いました。また、アンケート回答者のうち6世帯に追加でヒアリング調査も実施しました。

ニーズ調査から見えたこと

●約9割が「体験に対して諦めや不安」を感じている

「子どものしたい(してほしいだろう)ことができなかった経験がありますか？」という問いに対して、「はい」が274件(79.4%)、「今後そのような不安がある」が51件(14.8%)であり、全体の約9割が諦めの経験や今後への不安を感じていました。

ニーズ調査詳細はこちらから

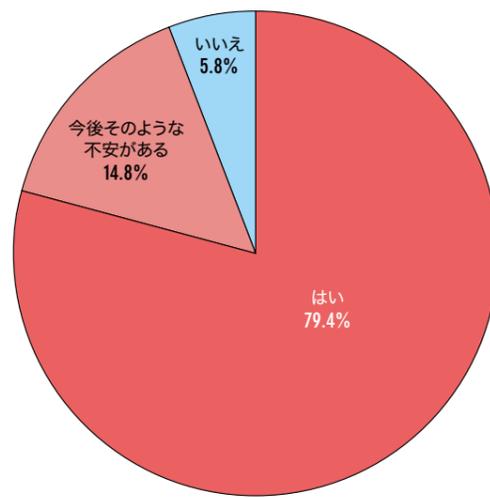


※紙媒体の報告書を希望される場合は、チャリティーサンタまでお問い合わせください。(問い合わせ先は裏表紙参照)

アンケート調査概要

- ① 調査対象 岡山市内児童扶養手当受給家庭のうち、満3歳～9歳の児童を持つ1,997家庭
- ② 実施期間 2019年11月1日～11月15日
- ③ 回答者(回答率) 345家庭(17.3%)

子どものしたい(してほしいだろう)ことができなかった経験がありますか？



3歳の子どもの保護者

遠出となると交通費や遊園地代金、外食費が高いため、いつも休みの日は近場の公園で遊んでいます。娘をいろいろなところに連れて行ってあげたいですが今は厳しいです。保育園でもいつも連休明けに「どこか行ってきたの？」と先生が娘に質問します。娘は答えません。



7歳、6歳の子どもの保護者

子どもがやりたかったことが、金銭的に余裕がなくてできなかった。私の仕事の都合で送迎をあげられなく、チャレンジさせてあげられなかった。

●体験を諦めさせるのは、「金銭的・時間的・精神的な理由」、そして、「頼れる人がいない」から

「子どもがしたいと思っている経験ができなかった(もしくは今後不安を感じている)理由があれば教えてください」という問いに対する回答は、「金銭的理由」「時間的理由」「精神的・体力的理由」が多く、次いで、「家族や友人など協力してくれる人がいない」という声も多く上がっていました。

●「他の家庭はできていること」に関する我慢や不安

自由記述では、ほとんどの項目で、「友達がいるのを羨ましがって」「両親そろっている家庭と比較してしまい」といった他者との比較がみられました。そして、諦めさせているのは「自分のせい」と責任を感じている保護者が多くありました。子どもに対して「してあげたい気持ち」がある

にも関わらず、「したいことを諦めさせてしまった」こと。まわりの家庭にとってはささやかな体験であっても、それさえ諦めさせざるを得ないという経験を重ねることで、子どもの体験の不足だけでなく、親子双方に自己肯定感が育まれにくい環境となっている様子がうかがえました。



6歳、4歳の子どもの保護者

長女が年長になり周りは習いごとの話やお出掛けした話をよくするので、すごく羨ましがっています。ですが金銭的に子どもがやりたいと思っている事をなかなかさせてあげられません。親の愛情だけではどうする事もできない事があるのだと痛感しました。



8歳、6歳の子どもの保護者

平日は朝から夕方まで仕事をしているので、週末はいつも家の片付けなど家の事ばかりになりがちで、子どもが公園行きたい!出掛けたい!と言っても連れていくのが難しいことが多々あります。出先で私1人で2人の子を見るのが大変だったりするので、出掛ける場所も決まったところになりがちです。



8歳の子どもの保護者

休日にイベントに行きたいと言っても、そこで風邪をもらってきたら、疲れがたまって風邪をひいたらと考えて行くのをやめる事は多々あります。休日に普段できていない家事を片付けないといけないので休日=遊びに行く、はなかなか厳しいです。



9歳、5歳、1歳の子どもの保護者

男の子3人を育てています。2人目まであまり感じませんが、3人目からひとり親になり、物理的に、大人の手が足りないと思う事が多々増えました!男の子は、特に活発で目が離せないで常に目をみはっていないといけません。



9歳の子どもの保護者

夏にプールに行ったときに荷物を置いたままに出来ず、結局ほとんど荷物番をすることになり、娘だけでプールに行き『もっとお母さんと遊びたかった』と言われツラかった。同じくイベント等の場所取りや並んでる時は仕方ないことだがその場を離れる際はまた一から並び直しや場所を取り直しになる。



お祝いごと

16歳、10歳、8歳、6歳の子どもの保護者

お誕生日や Xmas にプレゼントを渡す余裕が無いことがあって、個人で差が出てしまう。子どもと遊ぶことがなにより好きで、子ども達は「ママ大好き!ママ遊ぼう!」というのに、子どもとの時間が圧倒的に少なく、寂しい思いをさせている。実際に寂しいな...と言ったり、お迎えの時に凄く喜ぶので、子どもの事を守る為の離婚であったが、その度に申し訳なくなる。



習いごと

7歳、5歳の子どもの保護者

習いごと、周りの友達は色々しているの、自分も習いたいと言ってきましたが、時間的にも金銭的にも余裕がなく、仕事があるから送り迎えも出来ないと伝えました。



旅行

4歳の子どもの保護者

保育園のお友達などが旅行などで県外に行ったり、有名なスポットに遊びに行った話を聞いてきて、家で自分もそこに行きたいと言われますが、休みもなかなか取れず、金銭的にも余裕がないため、いつもごめんね、と言って連れて行ってあげることができません。



学校園の行事

3歳の子どもの保護者

子どもが両親と両手を繋いで歩いている。時々子どもはジャンプをしたり楽しそう。こういった風景は頻繁です。運動会も、参観日も両親で来る人が多く寂しそうです。

体験活動が子どもの様子にどのような変化をもたらすのか。今後の支援にどのようなことが期待されるのか。——子どもと共に体験活動に参加したひとり親家庭のお母さんに実感を伺いました。後半では、一緒にご家庭のお話を伺ったNPO法人岡山市子どもセンターの美咲さんと共に、これからの体験活動支援について考えていきました。

体験活動に参加して、親子の変化と今後への期待

Aさん
小学校4年生の娘

経て時や協いの通事情報を受けている。最も困っているのは、養育費が足りず生活費が足りないこと。現在は養育費を毎月少額ずつ積み重ね、以前より生活費の負担が増している。

Bさん
中学校2年生の娘
小学校4年生の息子

コロナの影響で在宅時間が多くなり、電気代や消費品費が毎月少額ずつ積み重ね、以前より生活費の負担が増している。

Cさん
3歳娘

生活は厳しいがまだ子どもが小さいため、食費や生活費にそこまでお金のかからないことが救い。子どもが生まれてすぐに新型コロナウイルスが流行し、体験に難しさを感じている。一人で仕事をやっていたら、追われて一日が終わってしまう。



体験が家族の思い出や子どもの新たな一面を掘り起こす

Aさん クリスマスに「サンタクロースの訪問」をしてもらいました。家計は大変で食費も削るような状況で、気持ちがあっても子どもの誕生日やクリスマスにプレゼントを渡してあげることが難しいです。そうした中で内緒にしていたサンタさんの訪問。子どもは目をキラキラさせて喜んでいました。今では毎年の楽しみになっており、親もホッとした気持ちで一緒に楽しく過ごせて、親子での思い出をつくるのができて嬉しいのです。

「駄菓子おじさんの訪問」※P8も、子どもにサプライズをしようと申し込みました。新型コロナウイルスの影響で学校が休みになるなど、子どもも行きづらいう状況でした。さまざまな我慢を続けていたところでの貴重な体験に、娘も「びっくりしたけど、とても楽しかった!」と言って家族の思い出になりました。

Bさん 招待枠でバレエの鑑賞をさせてもらいました。カーテンコールや止まない拍手といった劇場の一体感など、この企画がなければ知らなかった非日常的な世界を、子どもたちと一緒に体験でき

たことが嬉しかったです。クリスマスや誕生日の企画などにも参加し、児童書をプレゼントしていただきましたが、これまではまったく興味を示さなかった子どもが本に夢中になるということもありました。体験企画があったからこそ、この思いがあります。

ひとり親だと時間にも気持ちにも余裕がなく、どうしても自分のことをおろそかにしがちです。その中でも「エステの職業体験企画」※P10など、母親のことも大切にしてくれる企画があることが嬉しかったです。親も体験活動が楽しめることになると、子どもも一緒にいつそう楽しい気持ちになるように感じます。

Cさん 公民館で太鼓を叩く体験がありました。子どもたちが自由に体験できるプログラムですごく楽しそうにしていました。技術を教えてもらうものではないので上手になるということはないのですが、子どもが何度か太鼓のところにきたがり、ずっと嬉しそうに叩いていました。こんなに夢中になるんだ!と驚きも感じました。

「真珠のネックレスをプレゼント」※P14で子どもが作った箱に入った真珠をいただいた時、地域

お母さんの座談会を聞いて、子どもが育つ「体験」を担う大人の存在

NPO法人岡山市子どもセンター
代表理事 美咲 美佐子さん
子どもの社会参画の機会を拡げるとともに、子どもたちが豊かな「子ども時代」を過ごすことができるような環境づくりを、多くのボランティアと共にすすめています。

体験の必要性と支援との接点

美咲 みなさんのお話を伺って、子どもの成長にとっての体験の大切さ、親子での体験を求めている家庭が多いことを改めて感じました。岡山市子どもセンターでも昨年、大型人形劇「エルマーのぼうけん」にひとり親家庭を招待しました。参加したご家庭から、子どもたちのとても感動した様子を教えていただきました。「三半規管の疾病により自転車に乗ることを諦めていたのですが、当日観劇後、挑戦し自転車に乗れるようになりました。エルマーみたいに自分も!」と思ったのでしょうか。文化の力というか感動体験の持つ可能性を感じました。子どもの豊かな感性や想像力を育む場の必要性を改めて感じました。私たちは「体験は子どものビタミン」と考えています。子どもが育ち、社会の中で生きるためになくてはならないものです。学校教育だけでは足りない社会的な学びを、体験を通じて積み重ねていくこと、子どもと一緒に学びながら体験することを大切に活動してきました。

今日のお話で親子の体験を支えるために社会課題と支援者の持つ資源をうまく結び付けられたら、私たちにできることはたくさんありそうだと気がつきました。



美咲さん 河津

河津 私たちチャリティーサンタは、親子の思い出を何よりも大切にしています。「心に残る思い出」は成長過程でさまざまなことがあっても、その人を支える軸になると思います。親と子どもたちが前を向き、自分自身が大切な存在だと感じられる時間を届けていきたいと考えています。また、幼少期の子どもをもつ家庭の体験のニーズは高く、困窮世帯ではより支援が必要とされていると感じます。また、そのことが、他の支援につながるきっかけにもなると思います。

まだまだ足りない体験の機会とマンパワー

河津 ただ、体験プログラムに参加できる枠が少ないなど、需要と供給のバランスをとることはまだまだ難しいです。企業や団体から支援したいという声をたくさんいただき、プログラムは増えていますが、同時に抽選で落選してしまう家庭も増えています。支援したい気持ちはとても素敵で、少ない枠でも必要な子どもたちに体験を届けられるならと思って発信しますが、その一方で落選した家庭が感じられている悲しみもあると思います。

美咲 子どもに参加したいか確認して申し込んだものの落選という話が、とても印象的でした。

の人たちの想いがとても嬉しく感じました。この企画に参加して、私自身もひとり親のお母さん向けに何かやってみたいと思うようになりました。自分がひとり親家庭の大変さを知っているからこそ、工夫してできることに取り組んでみたいと思います。親が楽しめる機会は、子どもにとっても良い影響があると感じています。

体験活動への参加のしやすさは大切

Aさん 親子に良い影響があるのはわかっていますが、体験活動に参加するにはいろいろとパワーが必要です。ひとり親は仕事と家庭を一手に担っています。子どもをワクワクさせるような体験をさせてあげたい気持ちはありますが、あまりお金をかけることもできず、良いなと思う行事を見つけても、時間的にも余裕がなく参加できないことがあります。日程の候補がもう少し増えると、参加できる家庭も増えるかもしれないと思います。

Bさん 金銭的なこともそうですし、イベント日程が限定的だと、参加できないなあときらめる

と感じました。何度も続くと、楽しみにしていた子どもにとっては本当にしんどいだろうと思います。参加の機会が充実していることも大切ですね。

河津 物理的・財政的に参加枠を増やすことが困難なら、日常的にだれでも参加できる体験の機会がどの地域でもあることが大事ですね。やりたいことを諦める子どもたちを減らすためには、子どもがやりたいと思ったことを応援できる大人が増えることが必要です。子どもたちのために何かしたい、でも何ができるかわからないという方はぎつとおられると思います。そういう人達を支援に巻き込むことができるように取り組んでいきたいですね。

さまざまな組織・地域の人と共に

美咲 体験の機会を増やしていきたいけれど、ひとつの組織がもつ資源には限りがあります。だからこそ、いろんなところと一緒に体験活動をつくっていくことは大切ですね。また、公民館などの地域に根付いた既にある資源をもっと上手に活用できればと思います。

河津 すべての家庭に支援を届けるためには、地域の資源を活用しながら、日時や開催場所や対象年齢など、さまざまなケースを想定して選択肢を拡げていく必要がありますね。関わる人が増えるほど、選択肢も拡がっていくのだろうなと思います。

美咲 企業や団体に体験活動の支援に参加していただくことはもとより、地域に暮らす一人ひとりが想いを持ってこうした取組に参加することも大切ですね。多くの人が想いをもって関わることで、社会は変わっていくのではないかと思います。

河津 社会全体が子どもに目を向けることは本当に大切ですね。困難な状況にある子どもたちは

ことが多いですよ。さらに、できればいろんな場所で開催されると良いなとも思います。経済的な理由で車を持っていないご家庭も多いでしょうし、自力で移動できる範囲はやはり限られてしまいます。

支援の拡がりに期待して

Aさん 抽選の体験活動に当選した時はやっぱり嬉しいですね。だからこそ、落選は悲しくも感じます。子どもが大きくなってくると本人の参加したい気持ちをはっきりしてくるので、意思を確認してから申し込みたい気持ちがあります。ただ、それで落選すると子どもたちがガッカリしてしまいますよね。子どもたちの体験に目を向け、困難を感じている家庭の支援に参加する団体・企業がもっと増えるの良いなと思います。

Bさん 支援者の方に感謝しています。支援者の方も同じく新型コロナウイルスの影響で大変なのはわかるので、より多くの支援を求めて良いのかはわからないです。ただ、今は学区限定など、住んでいる地域などの条件によって、支援を受けている人と受けられない人の格差が大きいと感じます。いろんな支援が、すべての家庭に均等に行き渡るようになれば良いのにな、と思います。

Cさん 私も企画に参加したり、地域の方と接する中で「自分も何か」という気持ちを持つことができました。体験にはこういった前向きな気持ちになる力があると思いますし、私のように何かしたいと思った人を応援してもらえると、支援にも拡がりが出てくるのかなと思っています。

画面の向こうにいるのではなく、自分の身近な地域に存在しているという視点を持った人を増やしていきたいです。そういう人が支援に参加しやすくなる取組を考えることも必要です。「自分たちにも関係がある・できることがある」と実感できて初めて行動できると思います。その気づきを提供できると良いですね。

子どもたちが地域の中で健やかに育つために

美咲 コロナ禍ですますます地域と接点をもつ機会が減っている現在、困りごとを家庭内で抱え込まず、頼れるつながりが身近にあることも重要ですね。一人じゃやらないだと安心できる支えが必要です。私たちのようなNPOは、その支えになれるように力を付ける必要があります。ただし、一部の組織が頑張るだけでは届けられる支援が限られてしまい、支援を受けられる人と受け取れない人の間で格差を生んでしまいます。たくさん人の間で格差を生んでしまいます。たくさん人の組織や個人ができる範囲で取り組み、さまざまな支援の充実につながればと思います。

河津 いろんな人や組織と一緒につながりながら活動することによって、子どもたちを支えていけたらいいですね。

美咲 地域の中で心が動く体験は、大人が思う以上に子どもの成長に大きく影響します。物事に挑戦する気持ちなどは、そういった体験を通じて育まれます。さまざまな環境にある子どもたち一人ひとりが、心が動く体験ができるように、子どもと一緒に育ち合う関係をもちながら子どもの体験を考えられる大人が、市民レベルで増えることが大切です。コロナで社会課題が顕在化しています。これをきっかけに多くの人が社会の中のさまざまな課題に気づき始めました。そういった人々と一緒に子どもたちが地域の中で健やかに育つための支援を共にできたらと思います。

困難な子どもたち、自分たちができることを。



株式会社大町 代表取締役社長 秋山 秀行さん
【株式会社大町】1952年設立。約2,500平方メートルの「日本一のだかし売場」を持つ。

困難な子どもたちはどこにいるのか？

「子どもが笑顔になる体験は、どこで一番必要とされているだろう？」

最初に思いついたのは、社会的養護のなかにある子どもたち、児童養護施設の子どもたちでした。「楽しいことを届けたい」その気持ちからお菓子を配るパフォーマンスを始めたのですが、想像を越えて子どもたちは大興奮！施設訪問を続けていますが、駄菓子おじさんの姿を覚えていてくれて、子どもたちが駆け寄ってくるんですよ。

次に被災地の子どもたちや、最近では新型コロナウイルスの影響で「不必要なしんどさ」を抱えることになった、看護師の親をもつ子ど

「もともと競争社会への疑問があったんだよね」とお茶目に笑うのは、「日本一の駄菓子屋」を看板に掲げる株式会社大町の秋山さん。「最初から駄菓子屋をしていたのではなく、地域の子どもたちとの掛け合いの中から駄菓子屋を売るようになった」と話される姿そのままに、子どもに対して暖かな目線を持たれている企業です。

もたも浮かび、楽しい時間を届けられました。

ところがある日、まだ笑顔になる体験を必要としている子どもたちがいることに気がついたんですね。それが「ひとり親家庭」です。もちろんいろんな層があるので、すべての家庭をひとくくりに大変、とする訳ではありませんが、その多くが生活に困窮していることも国の調査で明らかになっています。しかし、ニーズを見聞きしても、その家庭にいる子どもたちが「わからない。会えない。届けることが難しい。」ことに気がついたのでした。

児童養護施設には行けば会うことができますし、被災地であれば地域がある程度わかります。しかし、ひとり親家庭は全国津々浦々にあり、その数はとても多い。そんな家庭に対し、僕たちはまだ何もできていないんじゃないか。そういった思いから、現在はいくつかのNPOの活動に一緒に取り組んでいます。

生活困窮の「家庭」を訪問してみよう

チャリティーサンタと一緒に、駄菓子おじ

さんとして対象の「家庭」に訪問させてもらいました。コロナ禍でイベントが減り、ワクワクする非日常的な経験が減ってしまった。生活困窮世帯にはイベント会場等への移動が難しいお家もある。集まるのが難しいのであれば、こちらから出かけて子どもたちに会いに行こう！と企画したのが「駄菓子おじさんから駄菓子屋をプレゼント」です。

もちろん、それぞれの家庭によって状況は異なります。しかし頼ることができず、ひとりでたくさんの子どものを養われているお家に訪問した際、お母さんの精神的な負担の大きさを感じました。数字では見えにくいしんどさを抱えている家庭が実際にあることを実感せざるを得なかったんです。

自分たちができること

子どもが成長する過程には、いくつもの未来を分ける選択があります。生活困窮世帯では、負の連鎖の中で選択肢が少なくなりがちです。こうした時、地域の大人のサポートが不可欠だと考えます。

では地域の大人や社会に何ができるか。それは、ひとりでも悩むことがないように、困った時に「困っている」と言い出すことができるところづくりです。

共に生きる社会の実現のためにできることを。

なぜ支援を始めたのか

ありがとうファームの2020年のスローガンは「わたしたちのSDGs・社会貢献、だれかのために」というものでした。

私たちの会社は就労継続支援A型事業所として、障がいや難病を持った方が働く会社です。「障がい」といってどちらかといえば「支援される側」に回ることが多く、世間からもそのようにイメージされがちです。そうではなく「自分たちもだれかのために

何か行動しよう、できることを始めよう」と前向きに旗振りをしたスローガンでした。

何かできないかと思つた時に着目したのは「子どもへの貧困」や「ひとり親家庭」への支援でした。

家庭の様子に触れながら、できることを少しずつ

子どもの体験不足などのお話をお聞きし、当初は子どもたちを私たち主催の商店街イベントに招待し、楽しんでもらうことを考えていました。しかし、突如として現れた新型コロナウイルスの影響を受け急遽中止。「でも子どもたちに何か届けたい」という気持ちで企画を練り直し手作りマスクと、缶バッジ制作体験キットのプレゼントを郵送する企画をチャリティーサンタさんと連携して実施しました。(写真①) この郵送企画は本当に多

「これは困窮世帯の子どもがつくった工作なんですよ」と写真を見せてくれたのはありがとうファームの担当・深谷さん。その後ろには子どもたちが工作を楽しめるアトリエが広がっています。生活困窮世帯の子どもに体験を届けるためにどんな活動をされているのか、そしてなぜ継続的に取り組むのか、広げていこうとしているのか、その思いをお尋ねしました。

くの方が参加され、喜ばれました。

実際に家庭の声を聞き、やりがいを感じているメンバーも多くなりました。継続して何かできないか、と考えていた際に「誕生日カード」の提案をいただき、現在も障がい者アティストと一緒に誕生日のお祝いをさせていただいています。(写真②)

また現在は試験的にはありますが、困窮世帯を対象に、当社にある「ハブラボ」という作業スペースを無償で使えるような取り組みを行っています。利用する子どもたちの中には普段の我慢からなのか、「本当に遊んでいいの？」と恐る恐る手を伸ばす子もいます。ここに来た時は我慢せず、自分の発想で思いっきり工作体験を楽しむ機会になれば、と思っています。また、ここではメンバーが一緒に子どもたちを見守りますので、そんな時にちょっと息つき、子どもたちの体験を見守ってもらえたらと思っています。

共に生きる「コミュニティ」

当社では「共生社会」という考えをとても大切にしています。共生とは、どんな人でも当たり前前に社会に参加ができる権利です。ありがとうファーム

活動のポイント

- 「郵送」という手法で楽しめる体験をプレゼント (誕生日カード・缶バッジ制作)
- 「スタッフが」一緒に子どもを見守る (ハブラボ)

【家庭の感想】

「届いてから、子どもたちにお手紙や缶バッジ制作のハガキを見せたら、とても喜んでいました。届いた日がお休みだったので、すぐ皆で缶バッジの絵を考えて書きました。子どもたちの表情がキラキラしていて嬉しかったです。」

「素敵なカワイイメッセージカードも一緒にあって、いろんな人の気持ちが嬉しかったです。」

活動のポイント

家庭の移動のしづらさに配慮し、家庭訪問型のイベントとして実施。

【家庭の感想】

なかなか外に遊びに行けないなか、企画して頂きありがとうございました。遊びに出られず毎日同じような暮らしや遊びしかできず退屈にしていることが多かったですが、見たことがない物を見ることや、家族や園などといった決まった人以外と会ったことで刺激になる時間を過ごすことができたようです。ありがとうございました。



チンドン屋に扮した駄菓子おじさんと各家庭を訪問。

僕たちにできるのは「食べる」という楽しい時間の共有体験を生み出すことです。「食べる」という行為は老若男女問わず日々の営みです。「おいしいね」「楽しいね」といった声かけが、家庭内の空気を和らげるものと思います。また、食べることは日常への入り込みやすさがあるのではないのでしょうか。「食べる」とやそれに付随する「楽しさ」をきっかけに家庭と接点を持つことで、さまざまな支援に手をあげやすくなることに少しでもつながればと思っています。

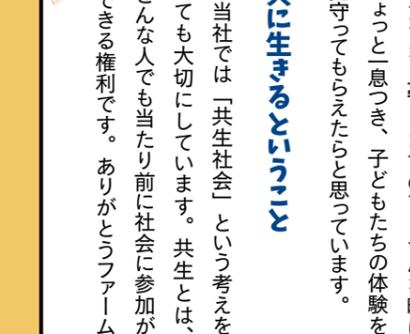


株式会社ありがとうファーム
アート部門・ハブラボ責任者/執行役員
深谷 千草さん

「株式会社ありがとうファーム」岡山市北区表町にある、障がいを持った方が楽しく暮らせる、一般就労に結びつく環境を創る就労継続支援A型事業所。

写真①

写真②



家庭の喜びが社員の喜びになった

株式会社ポーラ・
オルビスホールディングス

「感受性のスイッチを全開にする」という理念のもと、化粧品を中心とした「美と健康」に関わる事業を展開。

いつも頑張るお母さんに、誕生日プレゼントとしてエステ体験を届ける企画を毎月実施。
子どもたちはプチ職業体験としてお母さんにハンドマッサージを行います。親子で誕生日という特別な日を楽しめる企画を継続中です。

プログラムを始めたきっかけ

SDGsの勉強会に参加する中で、自分たちの会社でも何か取り組めな
いかと思い、勉強会の主催者であるありがとうファームの木庭さんに相談し
ました。その際、「自分たちがまず何をしたいのかということが大変だ」と
いうアドバイスをいただきました。そこで、店舗スタッフ一人ひとりが、P
OLAの仕事を通して何を実現したいのか、何を社会に提供したいのかを
確認する機会を設けました。

話をすることで、たくさん意見やアイデアが出ました。その中の一つが「ひ
とり親家庭の保護者の方のために何かしたい」というものでした。このアイ
デアを出してくれたスタッフはひとり親家庭で育ち、子どもの頃に自分の
母親の誕生日のお祝いを何もしてあげられなかった経験をもっていました。
同じような境遇の家庭に何かできないかと改めて木庭さんに相談し、チャ
リティセンターの取組に出会いました。

ニーズを知って工夫したこと

このプログラムを開始する前に、チャリティセンターさんと相談する中で
いろんな気づきがあり、それがプログラムの工夫へとつながりました。

例えば、ひとり親家庭で周りに頼れる人がいなければ子どもを置いて保
護者一人でごき出かけるのは難しいということです。そこで、子どもた
ちも一緒に楽しめる工夫を考え、「化粧品の空き箱を利用した工作」や「プ
チ職業体験としてお母さんへのハンドマッサージ」をセットで行うことにし
ました。このような工夫が家庭にとって価値があると知れたのはとても嬉
しかったです。

また、新型コロナで集合型のイベント形式は難しいため、期間を決めた
うえで家庭が来やすいタイミングに予約してもらう形式にしました。

プログラムを実施して

子どもたちは、プチ職業体験としてお母さんにハンドマッサージをするエ
ステーション体験を実施しますが、子どもにもマッサージしてもらって泣
いて喜ぶお母さんがいました。この体験は子どもたちにとって「自分の存
在が誰かを喜ばせられるんだ」と感じられる機会になっているのではない
かと思えます。

美容の仕事の本質は、自分がお客様に触れることで癒したり喜ばせたり
できることだと私は考えます。それを知ってもらえることは、子どもたち
一人ひとりの自己肯定感にもつながりますし、将来やりたいことへの選択肢
を広げるきっかけにもなると思えます。

こうした家庭の喜びは、スタッフのやりがいや喜びにもつながっている
と思えます。特に新人のうちは仕事が大変なことが多く、仕事の価値を感
じるころに達するまで道のりが長いです。このプログラムを通してお母さん
が感動している姿を見て、この仕事の喜びを知れることに、とても価値を
感じています。

また、私の思いとして「女性に自分の価値を感じてもらおう機会(きっかけ)
をつくりたい」というものがあります。自分自身もこの仕事を通してお客
様の喜びを生み出す中で自信を持てるように変わってきた一人です。プログ
ラムの時間を楽しくしてもらっただけでなく、雇用の機会などさらに次のステッ
プにつなげ、女性へのエンパワーメントができればと思います。



POLA ピオーネショップ後樂園店のみなさん
【担当者】ショップオーナー 大西 雅子さん

仕組み図 POLA編



普段自分のために使う時間は
なかったが、久しぶりに贅沢
な時間を過ごせて、とてもリ
ラックス出来て良かったです。

家庭からの感想

このような企画をして頂き、ひとり親家
庭でも、ひとりじゃなく地域の方々に支
えて頂いてるんだ、と実感できました。
これから子どもたちと3人頑張ろう、と
思えました! ありがとうございます。

はい、では
マッサージを
始めます!



とっても
気持ちいいよー

プロセス

- 01 SDGsに取り組みたいが何をしたらいいかわからない。
- 02 自分たちが仕事の中で、社会に何を提供したいか考えた。
- 03 アイデアの一つとして「いつも頑張っているお母さんへのエステ体験イベント」が出た。
- 04 子どもたちのプチ職業体験や作業時間を加えることで、親子で楽しめる企画にした。
- 05 新型コロナで集合型のイベントが難しいため、家庭がそれぞれの誕生日のタイミングで利用できる形にして年間で運営。

自分たちらしさを生かした 社会貢献

ギャップジャパン株式会社
Banana Republic

1978年にサンフランシスコで創業し、上質な素材使いを特徴とした上品で汎用性のあるアイテムが揃うグローバルブランド。メンズ、レディースの洋服に加え、シューズやハンドバッグ、アクセサリも扱う。

店員から状態の良い古着を集め「アパレル店員さんの素敵な古着」で持ち帰り可能なファッションコーディネート企画を実施しました。子どもたちはスタイリストを体験、お母さんはコーディネート&持ち帰りができる企画として、親子で楽しめる時間を提供しました。

プログラムを始めたきっかけ

元々私たちの会社には、地域社会に貢献するという文化が根付いています。社会貢献の形には物品やお金の寄付などもあると思うのですが、社内では従業員のスキルを活かしたボランティア活動がより推奨されています。私たちの仕事上でのスキルといえば「接客」ですが、どう活かすことができるだろうかと考えていました。

もちろん、仕事の上では「洋服を販売する」というのが接客の後にあることですが、実は「販売」という結果の前には過程があります。お客様のライフスタイルについて考えること、嬉しい、という気持ちやワクワク感を引き出すことといったものです。

今回のプログラムでは、販売の観点ではなく、ライフスタイルに合わせ、相手の喜びを引き出しエンパワメントを高める「接客」に着目しました。元々、私たちは働く上で創業者夫妻の「洋服を売る以上、のことをしよう」という志を受け継いできました。今回の企画を通じ、私たちが会社として大切にしている価値観について改めて考えることができました。

プログラムを実施して

会場に入ってきた時から、お子さんのワクワクしている顔が印象的でした。

お母さんは最初少し緊張していましたが、お洋服を手にとったり、お子さんと一緒になって洋服を選ぶ中で表情が変わっていくのがとても印象的でした。目のなかがキラキラしていく様子を見ることができたのは何よりも嬉しく、家庭からの喜びが詰まった感想を読むと感動で胸がいっぱいになり、「やってよかった」という気持ちになりました。

中でも印象的だったのは「お母さん可愛くなったね」という子どもの一言に喜ばれている様子。可愛くなったお母さんを見て、子どももお母さんも嬉しそうにしている様子が目に浮かびました。



パートナースhipでプログラムを豊かに、より実施しやすく

今回、私たちはチャリティーサンタさんと一緒にプログラムをつくっていったのですが、パートナーがいることで活動がしやすくなると感じました。

正直、店舗で働く身としては、仕事に自由がきかないことも多くあります。例えば、ずっと店舗に立っていると、事務的なことや受付など自分たちで回すには限界がある、と感じてしまいます。そういったオペレーションを一緒に担ってくれるパートナーがいたのはとてもありがたいことでした。

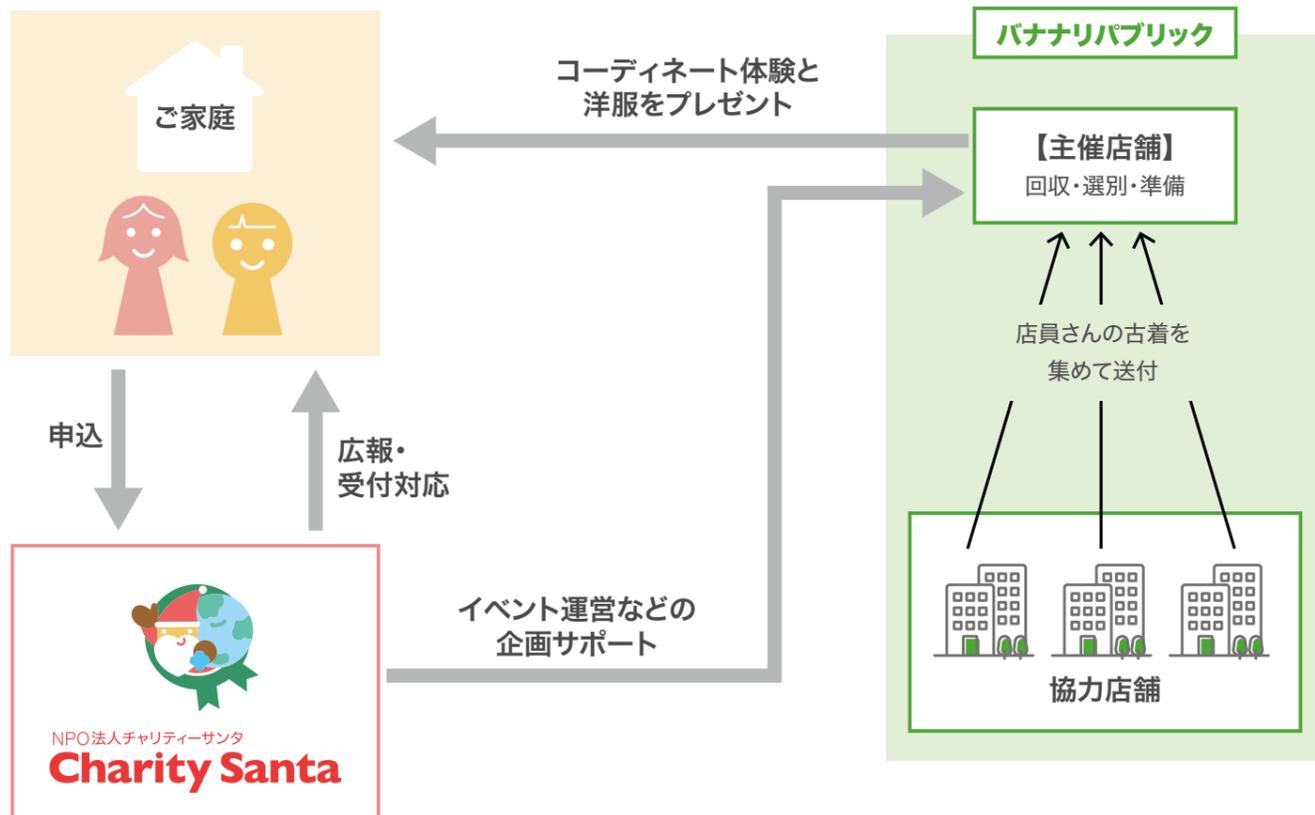
また、一番最初は「子どもたちに体験の場を」という視点のみで、店舗で職業体験的なことを考えていたのですが、「親子」での体験という視点、他の家庭の目を気にしない工夫、洋服の持ち帰りが可能という要素を入れるなど、一緒に話し合う中で家庭のニーズに沿ったプログラムをつくっていくことができました。

パートナースhipを通してさまざまな工夫を模索することがプログラムを豊かに、より実施しやすくする、と考えています。これから取り組もうと考えている企業の方も「自社だけで」と思わず、「一緒に取り組むパートナー」を探すことで、プログラム実施へのハードルが下がるのではないのでしょうか。



【担当者】
Banana Republic
Factory Store
三井アウトレットパーク倉敷店
ストアマネージャー 堀口 敦子さん

仕組み図 バナナリパブリック編



子どもたちが選んでくれた服は、私が着たことのないキレイ目系でビックリでした！子どもたちの理想とする母親は、こんな感じのかな☆と新たな発見でした！最後にアパレル店員さんからワンポイントアドバイスで、差し色を足してもらったら、物凄く雰囲気が変わってとても感動しました！！

普段、ゆっくり洋服屋さんで服を見ることも出来なかったのが、この企画が「体験」ではなく、「プレゼント」だった事にもとても感謝しております！初めて親子で選んだ服は、色々と思い入れのある大切な服となりました！

家庭からの感想

企画を考えてくださった方、ご協力いただいた企業の方々に、本当に感謝の気持ちでいっぱいです！！これからもこの企画で、沢山の子どもたち、お母さん達を幸せにしてあげて欲しいです。

これは
どうかな？

こっちの方が
似合うよ！



プロセス

- 「子どもの体験」として店舗内での「子どもの職業体験」を提案。
- 親子で楽しめる要素として職業体験中のお母さんのコーディネート企画もあがった。しかし、「店舗内で実施の際、一般客の目が気になること」や「買うことができない親の気持ちなどを考え、企画を練り直す。
- アンケートから「古着提供」のニーズなどを把握。
※「アパレル店員の古着」という付加価値をつけ、対象の親子をエンパワメントすることを意識した形で企画を再度検討。
- 実施後アンケートから、プログラムが好評であったことを把握。プログラムの継続・発展（他店舗への拡大）について社内検討中。

顧客を巻き込み、家庭にプレゼントを!

ジュエリー・タナカ

ジュエリーの修理やリフォーム、ファッションジュエリーやブライダルリング、真珠など幅広く取り揃え、販売。



【担当者】専務 田中 大資さん

地域の企業として社会貢献をしたい、そう思ったのがきっかけです。もちろん社会貢献として何に取り組んでも良いと思うのですが「自分たちだからこそできる、宝石で元気にできること」を探していました。もう一つ「自社だけでなく、お客様も巻き込めること」もテーマにしています。そうして仕事をしている中で思いついたのが「購入時にサイズ調整で余る真珠」でした。余った真珠を加工することもできるのですが、多くの方がうちに保管されていることに気がつきました。余った真珠を回収、ネックレスに加工をして、困りごとを感じられているひとりに親家庭にプレゼントしたい、と考えました。

「明日からも頑張ろう」と思える心のスイッチを押せる力があると信じています。負担感が大きいひとり親家庭のお母さんが前向きに頑張れるよう、その力になれたらと思っています。しかし課題になったのは「どのようにひとり親家庭に届けるか」ということでした。私たちに家庭にアプローチする力はありませんし、どう渡せばいいのか、も全く想像できませんでした。そのなか、チャリティセンターさんを知りました。家庭への声かけはもちろんですが、企画段階でお母さんと一緒にいる「子どもたちの存在」にも気づかせてもらいました。子どもたちと一緒に何ができるかを考え、「子どもたちも一緒に、お母さんたちにプレゼントする」という親子の体験につくりあげることができました。

同じ表町商店街にあるありがたいとうファームさんが子どもたちの工作体験の場所を提供してくださり、子どもたちが作った、世界でたった一つのプレゼント箱に入った真珠は何よりも特別なものと感じられ、またお母さんに嬉しそうに渡す子どもたちの姿は、とても感動的でした。寄付からお渡しまで、多くの人に関わってもらいながらプログラムを実施できました。今後も「続けていくこと」をベースに、縁をつなげていきたいと考えています。

どのように届けるか、どのように渡すか

新聞などに掲載されると、翌日から寄付について多くの問い合わせをいただきました。新型コロナの影響を受ける中で、暗い雰囲気が全国的に蔓延していましたが「こんな時にも、全国に暖かな方たちがおられる」ということに強い感動と勇気をいただきました。また寄付いただいた方がとても喜ばれることに驚きを覚えました。私たちはいつも、宝石を売ることを通じてお客様に喜びをお届けしているのですが、新しい形でお客様に喜びをお届けできた。——これはとても新鮮なことで、スタッフもとても前向きになることができました。

お客様から預かった大切な想い

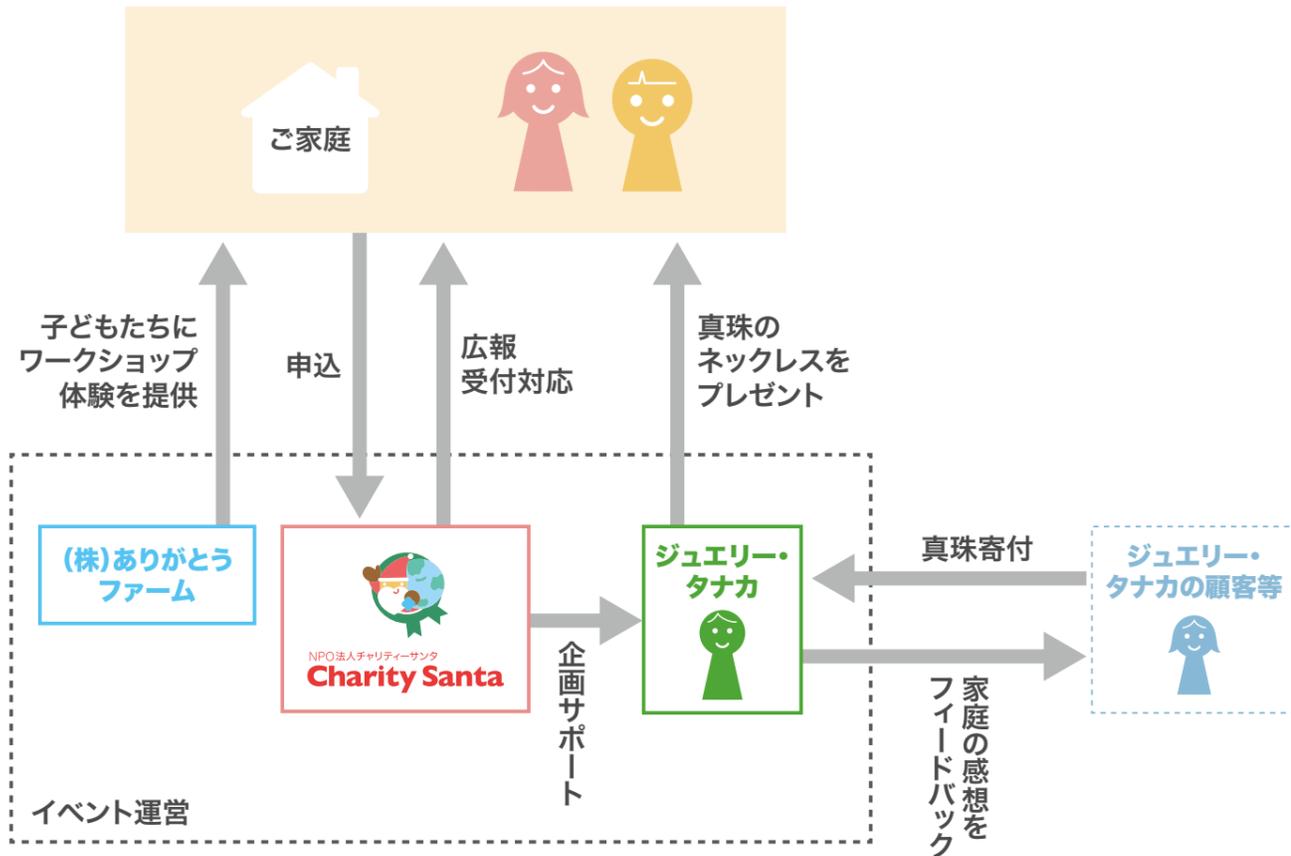
家庭からの感想

日々、仕事と家事と子育てだけでも時間が足りず、時間的にも、気持ち的にも、金銭的にも、自分自身のことは全て置き去りで過ごしていました。自分のことは後回しになってしまうのはシングルに限らず世のお母さんは皆さんそうだと思うのですが…子どもたちが元気で楽しく毎日を過ごしてくれればそれだけで満足!と思っていたので、正直今回の企画には軽い気持ちで応募いたしました。ですが、いざ当選の連絡をいただき、当日は1人の時間、同じ境遇の方々とお話をする時間、自分のためのケーキ（普段は子どもの分しか買わず、余ったスポンジ処理係なので…）、そして皆さまからの温かいお気持ち、お声かけ、子どもたちからのサプライズのプレゼント。それだけでも胸がいっぱいでしたが、帰宅して、いただいたネックレスをつけてみて、長い間オシャレを忘れていたこともあり、心が弾みました!子どもたちも「かわいい!かわいい!」と喜んでくれました。こんなに贅沢で温かな一日は人生で初めてで、一生忘れることがないと思います。明日から、さらにパワーアップして頑張れます!子どもたちにも優しくできます!

プログラムを始めたきっかけ

パールネックレスのサイズ合わせで余った真珠の粒の寄付を顧客に呼びかけ、集まった真珠で新たにネックレスをつくりました。ひとり親家庭の子どもたちと一緒にサプライズを考え、いつも頑張る親御さんにお贈りしました。

仕組み図 ジュエリー・タナカ編



プロセス

- 01 真珠の余剰を生かした社会貢献のアイデアが浮かぶ。
- 02 ひとり親家庭に提供したいと考えたが、対象家庭への広報や受付方法、渡し方など、実現に向けたノウハウが課題に。
- 03 連携団体・企業に相談し、家庭のニーズに合わせた企画づくりを行う。
- 04 母親にプレゼントをするだけでなく、子どもたちが工作などでサプライズを考える時間を用意し、家族の思い出になるよう工夫した。



お祝いの気持ちを広げて いくために！

誕生日のお祝いに困難を感じている生活困窮世帯に誕生日ケーキをプレゼントする企画を実施しています。高いニーズから、寄付の集め方や協力店舗の拡大についても検討中です。

プログラムを始めたきっかけ

ケーキ工房ポムは「お祝いケーキ専門店」として、沢山の方のお誕生日をお祝いしてきました。ケーキ屋を営んでいますから、お客様からお金をいただいて家族皆さんの笑顔と幸せな時間をおつくりする、というのを当たり前にしてきました。しかし昨年SDGsについて学んだことや新型コロナウイルスで世の中が支援し合う環境に変化したこと、母子家庭で育ち寂しい幼少期を過ごした方が身近にいたことなど重なり「ケーキを通じて何かできないか」と考えるようになりました。そんな中ありがとうファームさんが困窮世帯の支援をされていることや、チャリティーサンタさんとお誕生日のお祝いをされていることを知りました。（※ありがとうファームの事例：P.9参照）

チャリティーサンタさんに相談させていただいたところ、お誕生日が家庭で最も大切にされている行事だということや、困窮世帯などお子様のお誕生日にお祝いしたくてもしてあげられないご家庭が多いことを知り、このプロジェクトを立ち上げました。

連携によりできたこと

気持ちがあっても、困窮世帯に直接アプローチすることは困難です。また、通常業務と並行して対象のご家庭の予約受付などの調整を行うこともなかなか大変です。チャリティーサンタさんと一緒に活動することで、家庭へのアプローチや家庭との調整などを役割分担して行えるようになり、このプレゼント企画が実現可能になりました。受付や抽選

までしてもらったことで、家庭からの注文は普段と変わらない形で受けることができ、家庭に喜んでもらえるようにケーキづくりにしっかり取り組むことができています。

プログラムを実施して

予想を越えるたくさんの応募や、必要とされている声の内容に驚きました。また、プレゼントさせていただいたご家庭から「嬉しかった」「子どもがとても喜んでた」という喜びの声をいただけることはとても嬉しく感じています。

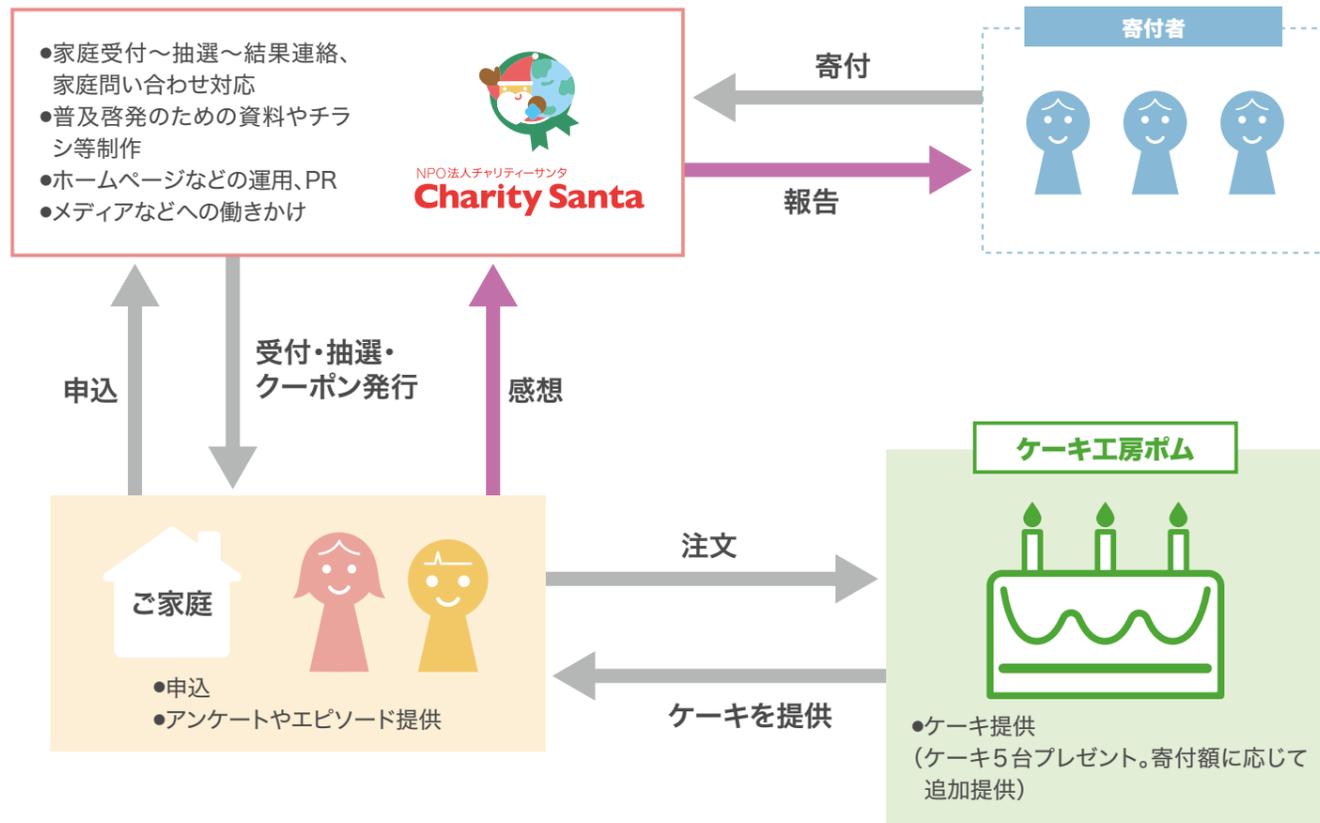
ケーキ工房ポムでは店頭での受け取りのほか、駅近くのスーパーなどで受け取ることができるケーキボックスをいくつか設置しているのですが、「車を持っていないのでケーキボックスで」とおっしゃられる方もおられました。今は地域が限定されるのですが、受け取れる場所が増えれば希望される家庭も増えるのだと思います。

今後は寄付者を増やしなが、届ける家庭を増やすことや、一緒に活動していただけるケーキ屋さんを増やし、どんな活動を広げて行きたいと考えています。



【担当者】代表 岩藤 こそ枝さん

仕組み図 ケーキ工房ポム編



家庭からの感想

とても素敵なケーキで、今年はコロナ禍で給料がなくなり、給付金等も条件に当てはまらずもらうことができない中でケーキのプレゼントは本当に助かりました。ケーキを箱から出した瞬間、子どもの表情が一瞬で笑顔に変わりました。大好きなキャラクターのケーキ、とても気に入ってくれたようで終始ハイテンションでした。翌日、保育園でとても嬉しそうにみんなの前で報告したそうです。本当に本当にありがとうございました。

昨日は素敵なケーキをありがとうございました。子ども達は大喜びで、誕生日の次男はメッセージカードはもちろん、ケーキの袋に貼ってあった紙も部屋に貼り付け、「ぼくの大事な宝物」と言っています。ケーキを見た瞬間は、親子共々歓声が上がリ、楽しい誕生日を過ごす事が出来ました。ケーキはとても美味しく最高でした。



プロセス

- 01 誕生日ケーキを困窮世帯に届けたいと考える。
- 02 自店舗でプレゼントのケーキ台数を決定、困窮世帯へ広報開始。
- 03 予想以上に希望が多く集まったが、全てに対応することは困難。また遠方への対応は受け取りの関係上、難しい。
- 04 寄付の集め方や、他のケーキ屋にも取組を拡大できるように現在検討中。



プロジェクトの詳細はこちら

02 家族で健康について知れるキット

主催 公益財団法人 岡山県健康づくり財団

子どもの参加人数 47人 (31世帯)

内容 健康を身近に考える機会を!と公益財団法人 岡山県健康づくり財団監修のこども向けのミニ冊子と、インターンシップの大学生たちが考えたあそびの企画を一緒にお届けしました。

家庭の感想

野菜カルタが1番のお気に入りでした。手洗いシートがあり、いつもよりやる気を出して率先してくれました。野菜の名前も覚えて、スーパーなどで、あ!あれは〇〇!などと名前を教えてくださいます。

03 シーガルの選手・コーチに教わるバレーボール教室

主催 岡山キワニスクラブ

子どもの参加人数 18人 (15世帯)

内容 Vリーグチームの岡山シーガルのバレー選手・コーチから教わるバレーボール教室を開催しました。子どもたち一人ひとりのレベルに合わせて、競技について教わっている姿はとても楽しそうでした。

家庭の感想

【子ども】とても分かりやすく教えてくれた。/スパイクが苦手だったが、今回教えてもらってスパイクを打つのが楽しくなった。
【保護者】上手い下手ではない、大切なことを教えてもらった。/子どもの自信につながる教室になったと思う。

04 バレエの舞台へ招待

主催 公益財団法人 日本舞台芸術振興会

子どもの参加人数 128人 (94世帯)

内容 日本はもちろん、海外でも高い評価をされている東京バレエ団の舞台に親子を招待しました。舞台芸術に触れる機会は新型コロナウイルスの感染拡大によりこれまで以上に減少していますが、とても良い体験になりました。

家庭の感想

コロナで家族で出かける機会がめっきり少なくなったため、本当に久しぶりの外出で、とても良かったです。母も娘もバレエは初めて観るので、最初は不安がっていましたが、東京バレエ団の皆様素晴らしい演技にぐいぐいと引き込まれて行き、大満足の観劇体験となりました。ご招待くださり、本当にありがとうございました!

01 カバヤのお菓子で自由研究

主催 カバヤ食品株式会社

子どもの参加人数 21人 (15世帯)

内容 カバヤ食品のお菓子がおうちに届き、それを食べて質問するとカバヤ食品の社員さんが直接答えてくれるという企画です。夏休みの自由研究にぴったりの企画になりました。またあわせてさくさくぱんだのTシャツを提供いただき、希望家庭へプレゼントさせていただきました。

家庭の感想

色んな味を試食できて子どもと楽しめました。地元企業から支援を頂けてとても嬉しかったです。

その他の取組紹介

05 池田動物園のナイトズーへ招待

主催 岡山東ロータリークラブ

子どもの参加人数 316人 (186世帯)

内容 池田動物園と中国デザイン専門学校がコラボしたナイトズーへひとり親家庭を親子で招待しました。普段見ることができない夜の動物の姿やキャンドルを使ったアート作品などを楽しんでいただきました。またお土産として子どもたち一人ひとりにお菓子がプレゼントされました。

※2日程を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大により第2回は中止となりました。第2回に参加予定だった方には動物園の入場券を郵送しました。

家庭の感想

なかなか夏休みといえども仕事があり、子どもを放置しておくのが心苦しかったのですが、このように企画していただけると、そこに合わせて時間を作れるのでありがたかったです。親子で楽しみにしておりました。チャリティーサンタの方、ロータリークラブの沢山の方たちが入口で待っていてくださって、お菓子まで用意してくださって、地元の方のお気持ちが一番うれしかったです。ありがとうございました。

地域課題と学生の学び

2020年9月、インターンシップの大学生と一緒に家庭の支援に取り組ました。取組を通じて学生が感じたこと、学んだことを紹介します。



岡山県立大学保健福祉学部 保健福祉学科3年生 三村 綾奈さん
岡山大学法学部4年生 藤原 颯太さん

家庭の声について

インターンシップの一番最初に、チャリティーサンタの支援家庭のアンケートを見てもらいました。たくさん家庭の声を聞いた時の感想や、印象に残っていることを教えてください。

絵本の選書について

インターンシップでは、支援家庭の子ども達の誕生日プレゼントとして贈る絵本を選んでもらいました。その活動では、子どもたち一人ひとりに向き合ってもらいましたが、どんなことを感じましたか。

三村：子どもたちの情報は少ないけど、選書を通じて子どもたちに向き合うことで、その家庭に向き合うことにもなりました。家庭の声を聞いてから実施したので、よりしつかり向き合いながら選書ができたと思います。藤原：普段法学部で学ぶときは「全体の平等」を考慮することが多いので、だれか個人のことを考えて活動するのはとても新鮮でした。また顔が見えなくても相手がいると考えることで、「流れ作業にはいけない」と感じました。

企業との取組について

インターンシップの中では、企業との取組についてアイデアを出すということもしてもらいました。家族で楽しめる「野菜かるた」を考えてもらい、形にするところまで一緒に取り組みましたが、大変だったことや企画する上で大事にしたことを教えてください。

藤原：案を出すことも結構大変だったし、案を出してもそこから企画につなげるのが大変でした。三村：企画の対象者にひとり親家庭が多くなるというのを考えて、親と子どもと一緒に遊んで楽しめることにしたいと思いました。子どもだけが楽しむのではなく、一緒に遊んで家族の思い出をつくれるようなものにしてほしいとインターン生全員で考えました。ひとり親の人も子どもと一緒に遊べるように、読み手動画を撮影するなど工夫しました。

インターンシップ全体の感想。学び

最後にインターンシップ全体を通して、感想と学びを教えてください。三村：子どもたちに直接かかわるわけではありませんが、間接的な支援の仕方を知ることができました。企業との連携で自分たちが考えたものを形にして届ける体験ができてよかったです。多様な支援の仕方を学ぶことができた。藤原：家庭のいろんな課題が少しずつ独立しているものではなく、複雑に要因が絡んでいること(託児ができないから仕事ができない等)を生の声から知ることができたのは、とてもいい経験だったと思います。

「野菜かるた」で遊んだ家庭の感想

● 仕事から帰ってなかなか子どもと遊ぶ機会がなく寂しい思いをさせていますが、ポストに荷物が入っているのを見つけて「プレゼントが届いたよ」と嬉しそうに開けている姿を見て疲れも吹っ飛びました。私も子どもの頃を思い出した。ありがとうございます。● かるたを初めて手にして、しばらく何度何度一緒に遊べました!自宅に居る事ばかりで1人遊びをさせることも増える中、一緒に遊べて有り難かったです。おもちゃばかりあげるよりこういう触れ合いも大切だと知らされました。● 普段は子どもとゆっくり遊んであげる時間や体力の余裕がないですが、せっかく頂いたので子どもと一緒に遊べました。白いカードがたくさんあるので、これからかるたの種類を増やして遊ぶのも楽しそうです。子どもも喜んでいました。どうもありがとうございました。



子どもたちのために何か始めたいと思われている企業・団体の皆様へ

生活困窮世帯の子ども達に対して、体験や思い出の支援に関わりたい、
体験や思い出の支援をしたいと検討中の企業・団体の皆様は是非お気軽にご相談ください。
本業を活かした寄付・プログラムづくり・企画運営など、ご希望に応じてサポートをさせていただきます。

詳細・問い合わせフォームはこちらから

<https://www.charity-santa.com/join/company-organization/support/>

発行元：NPO法人チャリティーサンタ

事業協働課：岡山市こども福祉課

発行日：2021年11月1日発行

岡山市市民協働推進事業

貧困家庭の抱える「子どもの体験不足」の解消にむけた体験活動ロールモデル構築事業

